

32社

級では、対象となる企業が道内8社、道外39社の計47社に上っていたが、特例措置が決定したの

道建設部建築局は、建築設計と設備設計との共同提案型プロポーザルを

導入を本格検討。12月には、北海道建築士事務所協会と、北海道設備設計事務所協会が道に対して

震災復興 公共事業費

# 本道にも6呎の津波

東日本大震災の発生で本道の太平洋沿岸に押し寄せた津波の高さが、地域によって大きく異なり、十勝川河口の砂浜では道内最大の6呎に上っていたことを、

北大大学院の渡部靖憲准教授(沿岸海洋工学)が現地調査で突き止めた。波の高さは津波の進路や海岸の地形、防波堤の形状などで変わり、高さ1・6呎程度にとどまる観測地点があった一方、十勝川河口で6呎に上り、近くの大津港には大量の波が入り漁船などに被害を与えた。渡部准教授は「実際の津波は想定を大幅に上回る場合がある。地域ごとの防災対策が求められる」と警鐘を鳴らしている。

渡部准教授ら4人が3月15-17の3日間、車で苫小牧から襟裳岬を回り釧路までを現地調査した。防波堤や建物などに付いた海水の痕跡高から水没した高さを

の痕跡を確認し「打ち上げられた漁船を乗り越えて波が来ていた」(渡部准教授)と津波の様子を語る。

この大きな津波をもたらした原因は、三陸沖の震源地からエネルギーを保ったまま到達した津波が、なかなか海岸で大きく盛り上がり、沖合にせり出した防波堤を伝い、入り江状の湾

その半面、三石漁港の1・6呎をはじめ、静内橋の西海岸と東静内の海岸線がともに1・9呎と低かった。渡部准教授は「津波は寄せた引いて終わるのではな

なる」と注している。津波警報は「津波は寄せた引いて終わるのではな

意喚起する。現地調査を行った感想として渡部准教授は「襟裳岬から西側は沿岸に住居が密

集し、ぜい弱に感じる。東側は平野部が広がり、高台のある避難所まで遠かった」と語り、自治体の防災

## 院の教授 太平洋沿岸を調査 地域ごとの防災対策求める

高を推測した。

道内への津波は、地震発生から約1時間後に襟裳岬から十勝管内にかけて到達し、その後、広範囲で潮位変化が観測された。気象庁と国交省の検潮所データによると、最大潮位は苫小牧

に集中して入ってきたからだという。湾内では岸壁の高さを上回る波が漁船を陸地に押し上げた。

報がなかなか消えないのは、そのため」と特有のメカニズムを説明し、「逆に波間に、節(ふし)ができて、津波が低くなる現象に当たる」という。

今回の津波が到来した時間帯は干潮だったが「満潮

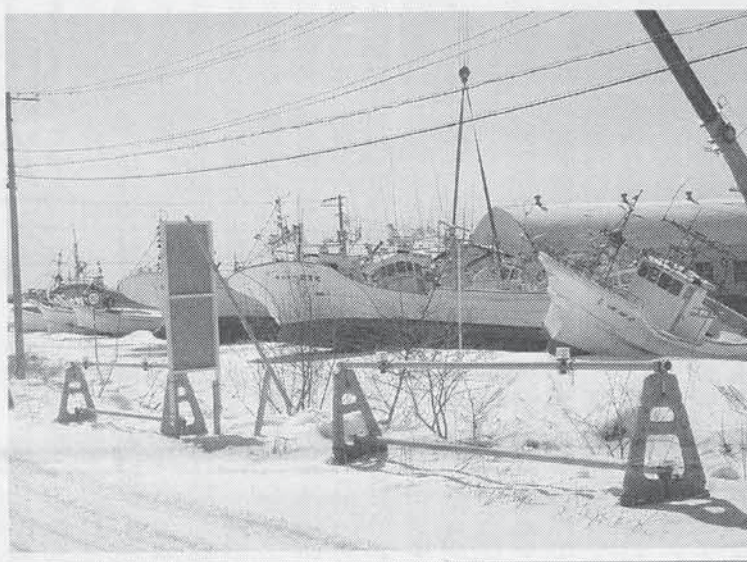
# 東日本 大震災

高を推測した。道内への津波は、地震発生から約1時間後に襟裳岬から十勝管内にかけて到達し、その後、広範囲で潮位変化が観測された。気象庁と国交省の検潮所データによると、最大潮位は苫小牧

に集中して入ってきたからだという。湾内では岸壁の高さを上回る波が漁船を陸地に押し上げた。

報がなかなか消えないのは、そのため」と特有のメカニズムを説明し、「逆に波間に、節(ふし)ができて、津波が低くなる現象に当たる」という。

今回の津波が到来した時間帯は干潮だったが「満潮



17日、撮影・渡部准教授

意喚起する。現地調査を行った感想として渡部准教授は「襟裳岬から西側は沿岸に住居が密集し、ぜい弱に感じる。東側は平野部が広がり、高台のある避難所まで遠かった」と語り、自治体の防災対策を見直し、個人の防災意識を高める取り組みを求めている。